

おくのほそ道・読み語り

目次 番号をクリックして下さい。

二十	二十	二十	二十	二十	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	二	二	一
石の巻	瑞岩寺	松島	鹽竈神社	末の松山	壺碑	宮城野	武隈の松	笠嶋	飯塚の宿	佐藤庄司が旧跡	信夫の里	安積山	須賀川	河の関	殺生石	雲岸寺	黒羽	那須野	日光	仏五左衛門	室の八嶋	草加	旅立ち
いしまき	ずいがんじ	まづま	しおがま	すえ	つほのいしづみ	みやぎ	たけくま	かさじま	いづか	さとうしやうじ	しのぶ	あさかやま	すがわ	せき	せつしやうせき	うんがん	くろばね	なす	にっこう	ほとけごえもん	むろ	そうか	ち
															ゆぎやうやなぎ								

四	四	四	四	四	四	三	三	三	三	三	三	三	三	三	二	二	二	二	二
十	十	十	十	十	十	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	十九	十八	十七	十六
五	四	三	二	一															

大	種	敷	福	汐	全	山	那	太	金	那	市	越	象	酒	出	最	立	尾	尿	平
お	い	つ	つ	し	ぜん	や	な	た	な	な	い	え	き	さ	で	も	り	お	し	ひ
お	ろ	る	る	お	し	ま	な	だ	な	ち	ち	さ	か	わ	が	ゆ	ば	な	と	ら
垣	の	賀	井	越	昌	中	谷	田	沢	台	振	後	鴻	田	三	上	石	花	前	泉
が	の	が		の	し	か	た	だ		ご	ぶ	ご	が	た	山	が	し	ざ	え	み
ぎ				松	じ	な										わ	わ	わ		み
	浜							の									寺	沢		み
								神												
								社												
								や												

天
竜
寺

永
平
寺

* 「芭蕉自筆奥の細道」岩波書店を底本としました。
* 「読み語り」のポイントを赤文字で示しました。

一 旅立ち 目次へ

【原文】

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又
旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とら
へて老いをむかふるものは、日々旅にして旅
を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。いづ
れの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊
の思ひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋
江上の破屋に、蜘蛛の古巣をはらひて、やや年
も暮、春改れば、霞みの空に、「白河の関こ
えむ」と、そぞろ神の、物に付て心をくるは
せ、道祖神のまねきにあひて、取るもの手に
つかず、もも引の破れをつづり、笠の緒つけ
かへて、三里に灸すゆるより、松嶋の月、先
心もとなし。住る方は人に譲りて、杉風が
別墅に移るに、

草の戸も住替る代ぞ雛の家

おもてはちく
面八句を書きて、庵の柱に懸置。

弥生も末の七日、元禄二とせにや、明ぼの

の空、朧々として、有りあけにて、光おさまれる物から、富士の峰かすかに見えて、上野谷中の花の梢、「又いつかは」と心ぼそし。むつまじきかぎりは、宵よりつとひて、舟に乗りて送る。千じゆと云所にて、船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、**幻のちまた**に離別の泪をそそぐ。

行春や鳥啼魚の目は泪

これを矢立の初として、行道猶すすまず。人々は途中に立ならびて、「後かげのみゆる迄は」と、見送るなるべし。

「語釈・語り」

月日を「時間」と訳するのは英語訳なら可能かも知れないが、意識過ぎる。月と太陽の意も含んでいる。**年**と対語になっている点も注意。

過客も難しい。通り過ぎる旅客（三省堂漢和辞典第四版）。旅人を重ねるのはどうかと思うが、「通り過ぎて行く」という言葉を補って訳した。

うかべの下に「者」を補いたいところだが、リズムが崩れる。日本語としてのつながりがおかしくなるが、そのままにした。

死せるあり死せるは已然形で、「已に死んでしまった」になる。後に「人」を補って訳し

た。

さすらへは下二段活用の自動詞。さすら・ふは「一」自動詞八行四段活用「は／ひ／ふ／ふ／へ／へ」と「二」自動詞八行下二段活用「へ／へ／へ／ふ／ふる／ふれ／へよ」の二種類があります。ここは「二」。

雲の風」にも通じる。物は風物の意で、わが身の意ではない。「片

彌生も末の七日陰暦三月二十七日。この年は閏一月があり陽暦の五月一六日。

元禄二とせ元禄二年。1689年。にや前年に改元されているのでボケてみた。

幻のちまたは作者の死生観を表しているが、詩的な言葉でもある。

行春ラストの「行秋ぞ」と対句になっている。る。

べしは推量で「…にちがない」。義務にとってはいけない。この助動詞は一筋縄でいかない。必ず辞書にあたるべし。

【現代語訳】

月日は永遠に通り過ぎて行く旅人であり、去来する年も又旅人である。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口をとらえて老いを迎える者は、日々が旅であり旅を住処とする。古人も多く旅に死んだ人あり。いつの年からか、ちぎれ雲を吹き漂わせる風に誘われて、漂泊の思いが止まず、海浜をさすらいいて、去年の秋、川

のほとりのあばら屋に帰り、蜘蛛の右巢を払
って、やがて年も暮れ、春が改まれば、霞の
空に、「白川の関を越えよう」と、分けの分か
らない神が、自然の風物に取り憑き自分の心
を狂わせ、道祖神が招いているようで、何も
かも手につかず、股引の破れを繕い、笠の紐
をつけ替えて、足の三里に灸をすえているう
ちに、松嶋の月が、早くも待ち遠しい。住ん
でいた処は人に譲り、杉風の下屋敷に移る時
に、

草の戸も住替る代ぞ雛の家

おもてはちく
表八句を書いて、庵の柱に掛けておく。

弥生も末の七日、今年は元禄二年であった
ろうか。曙の空は、ぼんやりと霞み、月は
有明で、光は消えつつあるも、富士の峰が微
かに見えて、上野谷中の桜の梢を、「再び見る
のはいつの日か」と心細い。親しい人はみん
な、前の晩から集まって来て、舟に乗り送っ
てくれる。千住と云う処で舟から上がると、
前途三千里の思いが胸にふさがり、幻の現世
の別れ道に、離別の涙を流す。

行春や鳥啼魚の目は涙

これを矢立の初とするが、行く道が少しも

進まない。人々は道なかに立ち並んで、「後ろ姿の見えるまでには」と、見送っているのだから。

二 草加

[目次へ](#)

【原文】

此のたび、奥羽長途の行脚、ただかりそめにおもひ立ちて、呉天に白髪の恨を重ぬといへども、耳にふれて、いまだに見ぬ境、「若生て帰らば」と、定めなき頼の末を樂て、其日漸早加と云宿にたどりて、瘦骨の肩にかゝれる物、先くるしむ。「唯身すがらに」と拵出立侍るを、帘子一衣は夜臥為と云、ゆかた、雨具、墨、筆のたぐひ、あるはさりがたき花おけなどしたるは、さすがに打捨がたくて、日々路頭の煩となれるこそ、わりなけれ。

【語釈・語り】

たどりて ing。途中で感じている。わりなけれ「ああ」という感じ。アイロニーではない。

【現代語訳】

この度、奥羽への長途の行脚を、ふと決心して、異郷で白髪となる悔恨を重ねること

はあるが、耳に聞いていても、まだ見たことのない土地を訪ね、「もし生きて帰ることが出来たら」と、あてにならない微かな望みを行く末の樂しみとして、その日、やっとう草加という宿に辿りて、瘦骨の肩にかかる荷物に、真っ先に苦しむ。「只身一つで」と身支度したのだが、紙子一枚は夜寝るためと云い、ゆかた、雨具、墨、筆のたぐい、あるいは断れない餞別などしてくれた品々は、さすがに捨てられず、日々道中の煩いとなるのは、ほんに仕方のないことだった。

三 室の八嶋 目次へ

【原文】

室の八嶋に詣。曾良が曰、「此神は本の花さくや姫の神と申て富士一躰也。無戸室に入て焼たまふちかひのみ中に、火々出見のみことうまれ給ひしより、室の八嶋と申。又煙を讀習し侍るもこの謂也。将、このしろと云魚を禁ず」縁起旨、世に伝ふことも侍し。

【語釈・語り】

諸終止形の送り仮名を書かない例が多い。申も同じ。侍丁寧語・謙讓語というより、雅語意識により用いられている語調を整えるもの。「侍」は極めて多い。丁寧語を含めて三十を越え侍。このしろは身を焼く↓煙↓魚を

焼いて食べる。子の代しろ（子供の身代わり）の
伝承がある。

【現代語訳】

室むろの八嶋やしまに参詣さんけいする。曾良そらが言うには「この神かみは、本花咲ほんはなさくや姫ひめの神かみと申まをして、富士山ふじさんと同じ御神体ごしんたいです。戸口とぐちをふさいだ室むろに入り、御身おんみを焼やかれ身の潔白けつぱくを誓ちかう最中さなかに、火出見ほでみの尊みことがお生まれになったので、室むろの八嶋やしまと申まをす。また煙けむりを詠よめむ習なわしがあるのもこの謂いわれです。また、このしろと云いう魚うしほを食たべるを禁いじています」と。こうした縁起ゆかりの趣旨しゆじが、世よに伝つたわっている話はなしもあるようだ。

四 仙五左衛門

目次へ

【原文】

廿日みそか、日光山にっこうざんの麓ふもとに泊とどる。あるじの云いけるやう、「我名わがなを、仙五左衛門せんござえもんと云いう。万正直よろずしやうじきを旨むねとする故ゆゑに、人ひとかくは申まを侍もうしはべる。まま、一夜いちやの草くさの枕まくらも、打ちうちとけて休やすみ給たまへ」と云いう。「いかなる仙せんの濁世じよくせ塵土じんどに示現しげんして、かかる桑門そうもんの乞食こつき順礼じゆんらいごときの人ひとを、たすけ給たまふにや」と、あるじのなす事に、心こころをとどめて見みるに、唯無ただむ知無ちむ分別ぶんべつにして正直しやうじき偏固へんこのもの也なり。剛毅かうき朴訥ぼくとつの仁じんに、ちかきたぐひ、智愚ちぐの清質せいしつ、
尤もつと尊とぶべし。

【語釈・語り】
ままでので。旨モツト。尤当然。

【現代語訳】
三十日、日光山の禁に泊る。主が言ったことは、「我名を、仏五左衛門と云います。万事正直を信条としております故に、人はこのように申しておりますので、一夜の旅寝も、くつろいでお休みください」と云う。「どのようにな仏が濁り塵にけがれた現世に示現して、こんな僧形の乞食順礼のような者を、お助けになるのか」と、主のすることを気をつけて見ていると、ただ無知無分別で、正直一途の者である。論語の剛毅本訥は仁に近きの類で、愚を悟る清らかな資質は、当然尊ぶべきである。

五 日光 目次へ

【原文】
卯月朔日御山に詣拝す。往昔、比御山を、二荒山と書きしを、空海大師開基の時、日光と改め給ふ。千歳来來を、さとり給ふにや、今比御光、一天にかかやきて、恩沢八荒あふれ、四民安堵の栖、穩也。猶、憚多くて、筆を指置ぬ。

あなたとふと青葉若葉の日の光

黒髪山は霞かかりて、雪いまだ白し。

剃捨て黒髪山に衣更 曾良

同行、曾良は河合氏にして、惣五郎と云。
芭蕉の下葉に、軒をならべて、予が薪水の勞
をたすく。此のたび、松嶋象鴻の眺、共にせ
む事をよるこび、且は羈旅の難をいたはり、
旅立 暁髪を剃り、墨染にさまをかへて、惣五
を改て宗悟とす。仍て黒髪山の句有。衣更の
二字、力有りてきこゆ。

二十余丁、山を登て滝有。岩洞の頂より
飛流して百尺、千岩の碧潭に落。岩窟に身を
ひそめ入て、滝の裏よりみれば、うらみの滝
と、申伝え侍る也。

暫時は滝にこもるや夏の初

【語釈・語り】

猶さらに。暁 其の際。きこゆ 理解される。
え 口語の発音通りに書いた。書写の折に
「へ」と書き改められた考える。

【現代語訳】

四月朔日、お山に詣拝する。その昔、この
お山を、「二荒山」と書いたが、空海大師が開
基の時に、日光とお改めになった。千年の末

来を悟られたのだらうか、今やご威光は、全
国土に輝きて、恵みは八方の隅々まで溢れ、
四民が安心して暮らす国は、穏やかである。
さらに言葉を加えるのは畏れ多いので、筆を
控える。

あぢたふと青葉若葉の日の光

西村本

あぢたふと青葉若葉の日の光

黒髪山は霞がかかって、雪がまだ白く残っ
ている。

剃捨てて黒髪山に衣更 曾良

同行の曾良は、河合氏で、惣五郎と云う。
芭蕉の下葉に軒をならべて住み、予の炊事の
苦勞を助けてくれる。このたび、松島象鴻の
眺を共にする事を悦び、また道中の難儀をい
たわろうと、旅立ちの時に髪を剃り、墨染め
の僧衣に姿を替え、惣五を改めて宗悟とする。
よって黒髪山の句がある。衣更の二字、力が
あると感じられる。

二十余所、山を登ると滝がある。岩洞の頂
きから飛び流れ百尺、千岩の深く青々とした
淵に落ちる。岩窟に身を潜めて入り、滝の裏

より見るので、裏見滝と言ひ伝えているのである。

暫時は滝に籠るや夏の初

六 那須野 目次へ

〔原文〕

那すの黒ばねと云処に知人あれば、これより野越にかかりて、直道をゆかむとす。遙かに一村を見かけて行に、雨降り日暮る。農夫の家に、一夜をかりて、明れば又野中を行。そこに野飼の馬あり。草刈おのこになげきよれば、野夫といへ共、さすがに情しらぬには、あらず。「いかがすべきや。され共、此野は東西縦横にわかれて、うるうる敷旅人の道ふみたがへむ、あやしう侍れば、この馬のとどまる処にて、馬を返し給へ」と、ちいさきものふたり、馬の跡したひてはしる。ひとり娘は小娘にて、名をかさねと云。聞なれぬ名の、やさしかりければ、

かさねとは八重撫子の名成べし 曾良

頓て人里に至れば、あたひを鞍つぼに結付て、馬を返しぬ。

〔語釈・語り〕

小娘 西村本は小娘。やさし優雅。

【現代語訳】

那須の黒羽という所に知人がいるので、こ
から野越になり、直道を行こうとする。遙
かに一村を見て行くに、雨が降り日が暮れて
しまった。農夫の家に一夜の宿をかりて、明
ければ又野中に行く。そこに野飼の馬がいる。
草を刈る男に嘆願すれば、田舎者といえ、さ
すがに情知らずではなく「どうしたものか。
しかし、この野は東西縦横に分かれて、慣れ
ない旅人は、道に迷うかも知れないし、心配
ですから、この馬のとまったところで、馬を
返してください」と云う。小さな者二人、馬
の跡について走る。一人は小娘で、名をかさ
ねと云う。聞き慣れない名が、優雅なので、
かさねとは八重撫子の名成べし 曾良
やがて人里に至り、謝金を鞍壺に結わえ付
けて、馬を返した。

七 黒羽 目次へ

【原文】

黒羽の館代、浄坊寺何某の方に、音信。
もひがけぬ、あるじのよろこび、日夜語つづ
けて、其弟桃翠など云が、朝夕勤とぶらひ、

みずから 自みずからの家にも伴ともなひて、親属しんぞくの方かたにもまねかれ、日ひをふるままに、ひとひ郊外しのはらに逍遙せうぎょうして、犬追いぬおもの跡あとを一見いちけんし、那すの篠原しのはらをわけて、玉藻たまもの前まえの古墳こふんをとふ。それより、八幡宮はちまんぐうに詣もうず。与よ一宗高いちむなだか、扇あふの的あてを射やし時とき、「別べつしては我われ国くに、氏神うぢがみ正ただ八まん」と、ちかひしも、此この神社しんじにて侍はべるときけば、感かん忘のう殊ことしきりに覚おぼえらる。暮くるれば桃翠宅とうすいたくに帰かえる。修しゆ験げん光こう明みやう寺じと云い有あり。そここゝにまねかれて、行ぎやう者じや堂どうを拜まじす。

夏山あしだに足駄あしだを拜かどむ首途でかな哉

【語釈・語り】

おもひがけぬ (訪問に) あるじの (は) よろこび (て)。ひとひある日。感かん忘のう神しん仏ぶつのありがたさを感じる。

【現代語訳】

黒羽くろばねの館代かんだいである、浄坊寺じやうぼうじ何某なにがしの処ところを訪たずねる。思いがけない訪問あそびに、主あるじは喜び、日夜語りつづけ、その弟とうすいの桃翠とうすいとか云う人が、朝夕に接待ていはいに心を尽くして訪ね、自分の家にも伴い、親戚しんせきの家にも招かれて、日が経つうちに、ある日郊外しやうがいに逍遙せうぎょうして、犬追物いぬおものの跡あとを一見いちけんし、那須なすの篠原しのはらに分け入り、玉藻たまもの前まえの古塚ふるづかを訪れる。それから、八幡宮はちまんぐうに詣もうでた。与よ市宗高いちむなだかが、扇あふの的あてを射やし時とき、「とりわけ我われ国くにの、氏神うぢがみ

正八幡」と祈願したのも、この神社でござい
ますと聞くと、ありがたさがますます強く感
じる。日が暮れたので、桃翠宅に帰る。
修験光明寺と云う寺がある。そこに招かれ
て、行者堂を拝す。

夏山に足駄をおがむ首途哉

八 雲岸寺 目次へ

【原文】
当国、雲岸寺のおくに、仏頂和尚の、山居
の跡あり。

「豎横の五尺にたらぬ草の庵

むすぶもくやし雨なかりせば

と、松の炭して岩に書付侍り」と、いつぞや
きこへ給ふ。「其跡みむ」と、雲岸寺に杖を曳
ば、人々すすむで、共にいざなひ、若き人お
ぼく道の程打さはぎて、おぼえず彼麓に至る。
山はおくあるけしきにて、谷道はるかに、松
杉くろく、苔したたりて、卯月の天、今猶寒
し。十景尽る所、橋をわたつて、山門に入る。
さて、「かの跡は、いづくの程にや」と、
後の山にかけのぼれば、石上の小庵、岩窟に
むすびかけたり。妙禅師の死関、法雲法師の
石室を、みるごとし。

本啄も庵はくらはず夏本立

と、とりあへぬ一句、柱に残侍りし。

【語釈・語り】

書付侍り一所不住の精神。きこへ給ふ仰つていた。おほく（若い人が）多く。おくあるけしき奥深い様子。

くらはず（食らはず） 西村本は「やぶらず」。

【現代語訳】

この国の雲岸寺の奥に、仏頂和尚の山居の跡がある。

「豎横の五尺にたらぬ草の庵

おすぶもくやし雨なかりせば

と、松明の消し炭で岩に書き付けました」と、いつぞや仰っていた。「その跡を見よう」と雲岸寺に杖を曳けば、人々は進んで、共に誘い合い、若い人々が多く、道中賑やかに騒ぎ、いつの間にか寺のある山の禁に着いていた。山は奥深い様子で、谷間の道が遙かに続き、松杉が黒く繁り、苔の雫が滴り、卯月の時候は今なお寒い。十景の尽きる処で、橋を渡って、山門に入る。

さて、「かの跡はどこか」と、後の山にかけ登れば、岩の上に小さな庵が、岩窟に寄せかけて造ってある。妙禪師の死関、法雲法師の石室を、見るようだ。

本啄も庵はくらはず夏本立

西村本
本啄も庵はやぶらず夏本立

と、とりあえずの一句を柱に残した。

九 殺生石・遊行柳 目次へ

【原文】

これより殺生石に行。館代より馬にて送らる。此口付のおのこ、「短尺得させよ」と乞。「やさしき事を望侍るものかなと、

野をよくに馬挽むけよ郭公

殺生石は温泉の出る山陰にあり。石の毒氣
いまだほろびず、蜂蝶のたぐひ、真砂の色の
見えぬほど、かさなり死す。

又、清水ながるるの柳は、芦野の里にあり
て、田の畔に残る。此所の郡守、故戸部某
の、「此柳見せばや」など、折おりにの給ひき
こえ給ふを、「いづくのほどにや」とおもひし
を、けふ、この柳のかげにこそ、立寄侍つれ。

田一枚植えて立去る柳かな

【語釈・語り】

殺生石鳥羽天皇の寵妃玉藻前（老狐の化

身)が殺されて石と化した。やさしき優しき。ばや願望。

【現代語訳】

ここから、殺生石に行く。館代から馬で送られる。この馬を引く男、「短尺をください」と乞う。「風雅なことを望むものだ」と、

野を横に馬牽むけよ郭公

殺生石は、温泉の湧き出る山陰にある。石の毒気はいまだになくならず、蜂蝶のたぐい、真砂の色が見えないほど、重なって死んでい

る。又西行法師が詠んだ清水流るるの柳は、芦野の里にあって、田の畔に残っている。この地の郡守、故戸部某が、「この柳を見せたいものだ」と、折々に仰っていたので、「どのあたりだろうか」と思っていたが、今日、とうとうこの柳の蔭に、立ち寄ったのだった。

田一枚植て立去柳かな

十 白河の関 目次へ

【原文】

心もとなき日数重るままに、白川の関にかかりて旅心定りぬ。「いかでみやこへ」と、

使たよりもとめしも断ことわりなり。中このせきにも、此関は、
三関さんかんの一いつにして、風騷ふうそうの人、こころをとどむ。
秋風を耳に残し、もみぢをおもかけ俤おもかけにして、青葉
の梢こすえ猶なほあはれ也。卵の花の白妙しろたえに、茨むばらの花の
咲さきそひて、雪にもこゆるこちぞする。古人こじん
冠かんむりをただし、衣装を改めし事など、清輔きよすけの
筆にも、とどめ置おかれしとぞ。

卵の花をかざしに関の晴着はれぎかな哉

曾良

【語釈・語り】

またよりまたよりにうちたよりに。便たよりつて。中このせきにも（名所の）。
白川。卵の花。茨むばらの花。雪。白の連鎖。かざし
頭髮または冠にさした花枝または造花。

【現代語訳】

不安な旅の日数が重なってゆくうちに、白
河の関にさしかかり、旅心たびごころが定まった。乎たいらの
兼盛かねもりが関越への感慨を「いかで都みやこへ」とつて
を求めたのも道理である。とりわけ、この関せき
は奥州三関さんかんの一つで、多くの歌人かじんが、心をと
どめた。能因法師のういんほうしの秋風を耳に残し、源頼みなもとのより
政まさの紅葉もみぢを思い浮かべていると、眼前の青葉
の梢こすえが一層心にしみる。卵の花が一面に真っ
白に咲いているところへ、茨むばらの花が咲き添っ
て、雪の中に関を越えているような心地がす
る。古人は冠を正し、衣服を改めた事など、
藤原清輔きよすけの袋草紙ふくろぞうしにも、書き留めておかれた

とか。

卯の花をかざしに関の晴着哉 曾良

十一 須賀川 目次へ

【原文】

兎角して、越行ままに、あふくま川をわたる。左に会津根高く、右に、岩城、相馬、箕張の庄、常陸、下野の地をさかひて、山つらなる。かげ沼と云所を行に、けふは、空曇りて、物の影うつらず。
須か川の駅に、等躬といふものをたづねて、四五日とどめらる。先、「白河の関、いかにこえつるにや」と問。「長途のくるしみ、身心つかれ、且は、風景に魂うばはれ、懐旧に腸を断て、はかばかしう、おもひめぐらさず。

風流の初やおくの田植うた

「無下にこえむもさすがに」と語れば、脇、第三とつづけて、一卷となしぬ。

この宿の傍に、大き成栗の本陰を、たのみて、世をいとふ僧有。「椽ひろふ太山もかくや」と、間に覺られて、ものに書付侍。其詞、

粟といふ文字は西の本と書て、西方浄
土に便ありと、行基菩薩の、一生、
杖にも柱にも、此本を用給ふとかや。

世の人の見付ぬ花や軒の粟

【語釈・語り】

ままにうちに。(後方には)常陸……。
を断深い感銘に浸り。無下に一句もなしに。
腸

【現代語訳】

そうこうして、関を越えて行くうちに、阿
武隈川を渡る。左に、会津根が高くそびえ、
右に、岩城、相馬、三春の庄と続き、後方に
はこの磐城の地と関東方の常陸、下野の地を
境にして、山が連なっている。かげ沼とい
ところを通ったが、今日は、空が曇っていて、
物の影が映らない。

須賀川の宿駅に、等窮という者を訪ねて、
四五日引き留められた。真つ先に、「白河の関
はどんな句を詠んで越えられましたか」と問
う。「長旅の苦しみで、心身疲れ、その上、風
景に魂が奪われ、懐旧に断腸の思いで、はか
ばかしく句作に思い逃らすことが出来ませ
んでした。

風流の初やおくの田植うた

「無下に関を越えるのはさすがに心残りで」と語れば、脇、第三と続けて、一卷に仕上げた。

この宿駅の傍らに、大きな栗の本陰を頼りにして、世を厭う僧がいる。西行法師の「椽ひろふ深山もこのようであろうか」と、閑雅に思われて、懐紙に書き付けた。その詞。

栗という文字は西の本と書きて、西方浄土にゆかりがあると、行基菩薩は、一生、杖にも、柱にも、この本をお使いになつたとか。

世の人の見付ぬ花や軒の栗

十二 安積山

目次へ

【原文】

等躬が宅を出て、五里計、檜皮の宿を離れて、あさか山有。道より近し。此あたり沼多し。かつみ刈比も、ややちかふなれば、「いづれの草を花かつみとは云ぞ」と、人々に尋侍れども、更知人なし。沼を尋、人にとひ、「かつみかつみ」と、尋ありきて、日は山の端にかかりぬ。二本松より右にきれて、黒塚の岩屋一見し、福嶋に泊る。

【語釈・語り】

花かつみ（あさか沼の）。歌枕。黒塚鬼女伝説。

失われた歌枕。それをひたすら訪ねる旅人。歌枕は忘却の中にある。

【現代語訳】

等窮の宅を出て、五里ばかりの松皮の宿を過ぎると、あさか山がある。街道から近い。このあたり沼が多い。かつみを刈る頃も、そろそろ近いので、「どの草を花かつみと言うのか」と人々に尋ねたけれど、いっこうに知る人はない。沼のあたりを探し、人に問い、「かつみかつみ」と尋ね回るうちに、日は山の端にかかった。二本松より右に折れて、黒塚の岩屋を一見し、福島に泊まる。

十三 信夫の里 [目次へ](#)

【原文】

あくれば、しのぶもぢ摺の石を尋て、忍ぶの里に行。はるか山陰の、小里に、石の半、土に埋てあり。里の童べの来りて、をしへけるが、「おかしは、この山の上に侍しを、往來の人の、麦畑をあらして、この石を試侍るをにくみて、この谷につき落せば、石のおもて、下さまにふしたり」と云。さもあるべき事もや。

早苗とる手もとやむか〜のぶ摺

【語釈・語り】

歌枕は土に埋まっていた。「もや」か「にや」か芭蕉は迷っている。真跡は「に」を削除の上に「も」を重ね書き。科学のわざは推敲の跡も明らかになっています。

【現代語訳】

明ければ、しのぶもぢ摺の石を尋て、忍ぶの里に行く。遙か山陰の小さな里に、石は半ば埋もれていた。里の子供が来て、教えてくれたのは、「昔は、この山の上にあったのですが、通る人が、畑の麦草を抜き荒らして、この石に摺りつけて試されるのを憎み、土地の人々がこの谷に突き落としたので、石の面が、下に伏してしまった」と云う。そんなことがあるべきだろうか。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

十四 佐藤庄司が旧跡

目次へ

【原文】

月の輪の渡しを越て、瀬の上と云宿に出。
佐藤庄司が旧跡は、ひだりの山際一里半計
に有。飯塚の里、鯖野と聞て、尋尋行に、丸

山と云に、尋あたる。是庄司が旧館也。麓に大手の跡など、人のをしゆるにまかせて、涙を落、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも、二人の嫁がしるし、先あはれなり。「をんななれ共、かひがひ敷名の、世に聞えつるもの哉」と、袂をぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらず。寺に入て、ちやを乞へば、爰に義経の太刀、弁慶が笈をとどめて、什物とす。

弁慶が笈をもかざれ帝幟

五月朔日の事也。

〔語釈・語り〕

かひがひ敷けなげな（勇ましいさま）。幼く力の弱い者が、困難な状況で立派に振る舞うさま。

〔現代語訳〕

月輪の渡しを越えて、瀬の上という宿に出る。佐藤庄司の旧跡は、左の山際の、ここから一里半ほど行ったところにある。飯塚の里の、鯖野と聞いて、尋ね尋ね行くに、丸山と云う処に行き着いた。これが庄司の旧城跡である。麓に、大手門の跡など人が教えるにまかせて、涙を落とし、又かたわらの古寺に、一族の石碑を残す。中でも、二人の嫁の石碑

が、真っ先に心を打つ。「女の身ながら、甲斐甲斐しき名声が、よくぞ世に伝え残ったものだ」と、袂を濡らした。墮涙の石碑も遠き中国にあらず。寺に入って、茶を乞うと、ここに義経の太刀、弁慶が笈を所蔵し、秘蔵の宝物としている。

弁慶が笈をもかざれ帑幟

西村本
笈も太刀も五月にかざれ帑幟

五月一日のことであった。

十五 飯塚の宿 目次へ

【原文】

其夜、飯塚にとまる。出湯あれば、湯に入て、宿をかるに、土坐に蓐を敷て、あやしき貧家也。ともしびもなければ、ゆるりの火かげに、寐所をまうけてふす。夜に入て、雷鳴、雨しきりに降て、ふしたる上に雨もりて、蚤蚊にせせられて眠らず。持病さへおこりて、消入計になん。短夜の空も、やうやう明れば、又旅立ちぬ。

猶よるの名残、心すすまず。馬かりて、桑折の駅に出。はるかなる行末をかかえて、かかる病覚東なしといへど、「羈旅、辺土の行

脚、捨身、無常の観念、道路にしなん、これ
天の命なり」と、氣力聊とり直し、路縦横
に踏て、伊達の大木戸をこす。

〔語釈・語り〕

あやしきみすぼらしく。ゆるりいろり。な
ん（侍る）。やうやうやつのことで↓草加。
猶まだ。名残余波。かりて雇って。覚束なし
不安である。

〔現代語訳〕

その夜、飯塚に泊まる。出湯があるので、
湯に入り、宿を借ると、土間に筵を敷いた、
粗末な貧家であった。燈火もないので、囲炉
裏の火影に、寢床をつくり横になった。夜に
入り、雷が鳴り、雨が激しく降り、寝てい
る上より雨が漏り、蚤蚊に刺され眠れない。
持病まで起こって、氣を失いそうだ。短夜の
空も、やっと明けたので、又旅立った。

まだ昨夜の名残で、氣分が進まず、馬を雇
って、桑折の駅に出る。遙かな行く道のりを
抱えて、このような病は、心細いが、「羈旅、
辺土の行脚、捨身、無常の観念、道路に死な
ん、これも天命だ」と、氣力を少し取り戻し、
道を縦横に踏み締めて、伊達の大木戸を越え
た。

【原文】

あぶみ摺、白石の城^{じょう}過ぎて、笠^{かさ}じまの郡^{こおり}に入れば、「藤^{とう}中^{ちゆう}将^{じゆう}実^{さね}方^{かた}の塚^{つか}は、いづくの程^{ほど}ならん」と、人にとへば、「これより遥^{はるか}右^{みぎ}に見^みゆる山^{やま}際の里^{さと}を、みのわ笠^{かさ}嶋^{じま}と云^いう、道^{どう}祖^そ神^{じん}の社^{やしろ}、かた見^みの薄^{すすき}、今^{いま}に侍^{はべ}る」とをしゆ。此^{この}比^{ごろ}の、五月^さ雨^{みだれ}に、道^{みち}いとあしく、身^みつかれ侍^{はべ}れば、よそながらながめやりて過^{すぐ}るに、「みのは、笠^{かさ}じまも、五月^さ雨^{みだれ}の、折^はにふれたり」と、

笠嶋^{かさじま}はいづこさ月の^{つき}ぬかり道

【語釈・語り】

実^{さね}方^{かた}は「枕^{まくら}草^{くさ}子^こ」にも多く語られています。よそ余^{あま}所^{ところ}。折^は時期^{じき}。ふれたり降^ふるの含^こ意^い。(蓑^{かさ}も)よく触^ふれ合^あっている(と苦笑^{くせう})。

【現代語訳】

釜^{あぶ}み摺^{みずり}、白^{しろ}石^{いし}の城^{じょう}を過^すぎて、笠^{かさ}嶋^{じま}の郡^{こおり}に入^いったので、「藤^{とう}中^{ちゆう}将^{じゆう}実^{さね}方^{かた}の塚^{つか}は、どのあたりか」と、人に問^とえば、「ここから遥^{はるか}か右^{みぎ}に見^みゆる山^{やま}際の里^{さと}を箕^{みの}輪^わ笠^{かさ}嶋^{じま}と云^いう。道^{どう}祖^そ神^{じん}の社^{やしろ}、かた見^みの薄^{すすき}が、今^{いま}も残^{のこ}っています」と教^{おし}えてくれた。この頃^{ころ}の、五月^さ雨^{みだれ}に、道^{みち}が極^{ごく}度^どに悪^{わる}く、身体^{からだ}も疲^{つか}れたので、他^よ所^{ところ}から眺^{なが}めて通^とり過^かぎたのだが、「蓑^{みの}輪^わ、笠^{かさ}嶋^{じま}の地名^{ちがひ}も、五月^さ雨^{みだれ}の、時期^{じき}によく似^に合^あっている」と、

笠嶋はらご五月のぬかり道

十七 武隈の松 目次へ

〔原文〕

岩沼宿

武隈の松にこそ、目覚る心地はすれ。根は土際より二本にわかれて、むかしの姿うしなはずと、しらる。先能因法師思ひ出。往昔、むつのかみにて下りし人、此本を伐て、名取川の橋杭にせられたる事など、あればにや、「松は此たび跡もなし」とはよみたり。代々、あるはきり、あるひは植次などせしと聞に、今将千歳のかたちととのひて、めでたき松のけしきになん侍し。

「たけくまの松みせ申せ遅桜」と、拳白と云ものの、餞別したりければ、

桜より松は二本を三月越

〔語釈・語り〕

人藤原孝義。将また。

〔現代語訳〕

岩沼に宿す。

武隈の松には、まさに目が覚める心地がす

る。根は土の際きわから二本に分かれ、昔の姿を失うつていないと知れた。何よりも先に、能のう因いん法師ほうしが思い出される。その昔陸奥守むつのかみとして当地ちに下った人が、この本を伐きって、名取川なとりがわの橋はし杭くいになさったことなどが、あったからだろうか。能のう因いん法師ほうしは再訪さいほうの際「松は此たび跡もなし」と詠よんでいる。代々よよ、あるいは伐きり、あるいは植うえ継つぎなどしたと聞くのに、今はまた千歳せんざいの形かたちが調ととのい、見事な松の眺めである。

「武隈たけくまの松見せ申せ遅桜おそぎくら」と、拳白きよはくと云うものが、饞別せつべつに詠よんでくれたので、

桜より松は二本を三月越みつきごし

十八 宮城野みやぎの 目次へ

〔原文〕

名取川をわたつて、仙台せんだいに入いる。あやめふく日ひ也なり。旅宿りよしゆくをもとめて、四五日逗留しごにちとうりゆうす。爰こゝに画が工こう加か右衛門えもんと云いものあり。聊いささか心こゝろある者と聞きて、知しる人になる。このもの、「年比としひさだかならぬ名どころを、考置侍かんがえおきはべればとて、一日案ひとひあん内ないす。宮城野みやぎのの萩茂はぎしげりあひて、秋のけしきおもひやらる。玉田たまだ、よこ野。つつじがおかは、あせび咲ころ也。日かげも、もらぬ松の林に入いり、「爰こゝを、本きの下したと云い」とぞ。おかしもかく露つゆふかければこそ、「みさぶらひみかさ」と

はよみたれ。薬師堂、天神の御社などおがみて、其日はくれぬ。猶松嶋、塩がまの所どころ、画にかきて送る。且、紺の染緒つけたる草鞋二束、はなむけす。さればこそ、風流のしれもの、爰に至りて其実をあらはす。

あやめ草足に結ん草鞋の緒

彼画図にまかせて、たどり行ば、おくの細道の山際に、十符の、管有。今も、年々十符の管菰を調べて、国守に献ずと云り。

〔語釈・語り〕

あやめふく日五月四日。聊多少。↓飯塚の宿。末の松山。知る人知人。年比年来。みさぶらひお供の方。みかさご主人にお笠を。おくの細道書名の由来。

〔現代語訳〕

名取川を渡って、仙台に入る。あやめを尋く日であった。旅宿を求めて、四五日逗留する。この地に画工の加衛門と云う者がいる。聊か心ある者と聞いて、知り合いになった。この者、「数年来場所の不確かな名所を、調べておきました」と言っている、ある日案内してくれた。宮城野の萩は茂り合って、秋の景色に思い遣られる。玉田、横野、つ、じが岡は、あせびが咲く頃である。日の光も洩れない松の林に入りて、「ここが、本の下という所です」と云う。昔もこの様

に露が深かったからこそ、「みさぶらひ（お供の方）みかさ（ご主人にお笠を）」と詠んでいるのだ。薬師堂、天神の御社など拝んで、その日は暮れた。加衛門は、その上に松嶋、塩釜の所々を、画にかいて贈ってくれた。また、紺染めの緒がついてある草鞋二足を、餞別にくれた。さればこそ、風流の痴れ者、ここに至ってその本性をあらわした。

あやめ草足に結ん草鞋の緒

あの絵図を頼りに辿って行けば、おくの細道の山際に、十符の管が見られた。今でも、毎年十符の管菰を作り、国守に献上しているという。

十九 壺碑 目次へ

〔原文〕

壺碑 市川村多賀城に有。

つぼの石ぶみは、高さ六尺余、横三尺計歟。苔を穿て文字幽也。四維国界之数里を印。此城、神亀元年、按察使、鎮守符將軍、大野朝臣東人之、所置也。天平宝字六年、大参議東海東山節度使、同將軍惠美朝臣朝、修造而。十二月一日」と有。聖武皇帝の御時にあたれり。むかしより、よみ置る歌枕、多くかたり伝ふといへども、山崩、川流て、道

あらたまり、石は埋うづもれて土にかくれ、本は老
て若本にかはれば、時移り、代よ変じて、其跡そのあと
たしかならぬ事のみ。爰こゝに至りて、うたがひ
なき、千歳せんざいの記念かたみ、今眼前いままへに、古人こじんの心を見
す。行脚あんぎやの一徳いっとく、存命ぞんめいの悦よろこび、
籍旅きりよの労ろうをわすれて、泪なみだも落おるばかり也。

【語釈・語り】

穿うがて纏まとっているのです。穴を開けるの意もあ
るので、「苔こけに彫ほられたように」とした。閱けみす
検証する。「見る」より強い。

【現代語訳】

壺碑つぼのいしづみ 市川村多賀城いちかわむらたがのじょうに有。

壺碑つぼのいしづみは、高さ六尺余り、横は三尺ほどか。
苔こけに彫ほられたように、文字は幽かすかである。四
方の国境までの里数しるが記しされている。「此城このじょう、
神亀元年じんきげん、按察使あせつし、鎮守府將軍ちんじゆふしやうぐん、大野朝臣おのあそん、
東人之あづまひと所置也おくところなり。天平宝字六年てんぴやうほうじ、参議東海さんぎとうかい
とうせんせつどしおなじくしやうぐんえみのあそんあさかり、修造也しゆぞう。
東山節度使とうせんせつどし同將軍惠美朝臣朝おんせいみあそんあさかり、
十二月一日じゆうにがついついたちとある。聖武皇帝しようむこうていの御代みよにあた
る。昔から詠み残のこされている歌枕は、多く語
り伝えられて、山は崩れ、川は流れて、
道は改まり、石は埋もれて土に隠れ、本は老
いて若本に変われば、時は移り、代よが替わっ
て、旧跡は確かではないものばかりだ。この
碑いしづみに至いたって、疑うたがいようもない、千年の記念かたみ、

今眼前がんぜんに、古人こじんの心を確かめる思いだ。行脚あんぎゃの一徳いっとく、存命ぞんめいの悦び、旅の労を忘れて、泪も落ちるばかりであった。

二十 末の松山 目次へ

【原文】

それより、野田のだの玉川たまがわ、沖の石を尋ぬ。末すえの松山まつやまは、寺つくりを造て、末松山まつしようざんと云いう。松のあひあひ皆墓原はかはらにて、「はねをかはし枝をつらぬる、契ちぎりの末も、終ついには、かくのごとき」と、かなしさも増まさりて、塩がまの浦うらに入逢いりあのかねを聞きく。五月雨さみだれの空、聊いささはれて、夕月夜ゆうづくよかすかに、籬まがきが島も程ちかし。あまの小舟おぶねこぎつれて、肴さかなわかつかつこ急いそぎ急いそに、「綱手つなでかなしも」とよみけむ、歌のこころもしられて、いとどあはれ也。

其夜そのよ、目盲めくら法師ほうしの、琵琶びばをならして、奥上おくじようるりと云いうものを、かたる。平家へいけにもあらず、舞まいにもあらず、ひなびたる、調子うち打上げて、枕まくらちかう、かしましけれど、さすがに、辺国へんごくの遺風いふう、わすれざるものから、殊勝しゆしように覺おぼえらる。

【語釈・語り】

死ねば墓に帰す。

【現代語訳】

それより、野田の玉川、沖の石を訪ねた。
末の松山には寺を造って、末松山と云う。松
の間々は全て墓地で、「翼を交わし枝を連ねる、
契りの末も、終には、かくのごとき」と、悲
しさも増って、塩釜の浦で入相の鐘を聞く。
五月雨の空が、少し晴れて、夕月が幽かに照
らし、籬が嶋も間近に見える。漁師の小舟が
漕ぎ連なって帰り、魚を分ける声声に、「綱手
かなしも」と詠んだ、歌の心も分かり、いっ
そうしみじみとした趣である。

その夜、盲目の法師が、琵琶を鳴らして、
奥浄瑠璃と云うものを語る。平家琵琶の語り
でもなく、幸若舞の曲でもない。田舎じみた、
調子で声を張り上げ、枕もと近く、やかまし
いが、さすがに、へんぴな土地に残っている
遺風、忘れずに伝えているものだと、殊勝に、
感じられた。

二十一 鹽竈神社 目次へ

【原文】

早朝、塩竈の明神に詣。国守再興改られ
て、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の
階、九仞に重り、朝日、あけの玉がきをか
かやかす。かかる道の果、塵土のさかひまで、
神霊あらたにましますこそ、吾国の風俗なれ
と、いと貴し。神前に、古き宝燈有。かねの
戸びらのおもてに、「文治三年和泉の三郎寄

進」と有あり。五百年來の倂おもかけ、今日の前うかにうか
びて、そぞろに珍めづらし。渠かれは、勇義ゆうぎ忠孝ちゆうこうの士し也なり。
佳名かめい、今に至りて、したはずと云事いうなし。
誠まことに、人能ひとよく、道を勤つとめ、義ぎを守りまもりて、佳名かめいをおも
ふべし。「名も又これにしたがふ」と云いり。

ひすでに 日既ひすでに、午ごにちかし。船ふねをかりて、松嶋まつじまに渡わたる。
其間そのあい二里余よ、雄島おじまの磯いそにつく。

〔語釈・語り〕

国守こくしゆ伊達政宗いずみ。和泉いづみの三郎藤原忠衡ちゆうかう。義経ぎけい
に忠誠を尽くす。椽垂本てんたるき。

〔現代語訳〕

早朝しゆうえい、鹽竈しおがま神社しんじに参詣さんけいする。国守こくしゆが再興さいこう
修営しゆうえいなさつて、宮柱みやばしらは太く、彩色たさいした垂本たるきは
きらびやかに、石段いしだんは、極めて高く重なり、
朝日あさひが、朱色しゆしきの玉垣たまがきを輝かせている。このよ
うな道の果て、国土の境まで、神靈しんれいあらたか
にましますこそ、吾国の風俗ふうぶくであるとは、ま
ことに尊い。神前しんぜんに、古い燈籠とうろうがある。鉄の
扉かたの面に、「文治三年、和泉いづみの三郎寄進さぶろう」とあ
り。五百年來の倂おもかけが、目の前に浮かんでき
て、無性に素晴らしい。和泉の三郎は、勇義ゆうぎ
忠孝ちゆうこうの武士ぶしである。佳名かめいは、今に至っても、
慕したわれない者はない。誠まことにに、人は十分に、道を
わきまえ、義ぎを守り、名譽なごを思うべきだ。
「名聲もまたこれについてくる」と云う。

日はもう、正午に近い。舟を雇って、松島に渡る。その間二里あまり、雄嶋の磯に着く。

二十二 松島 目次へ

【原文】

抑松嶋は、扶桑第一の好風にして、をよそ、洞庭、西湖を恥ず。

東南より、海を入れて、江の中三里、浙江の、潮をたたふ。嶋々の数を尽して、歌ものは天を指、ふすものは波に匍匐。あるは三重にかさなり、三重に畳て、左にわかれ、右につらなる。負るあり抱るあり。児孫愛すがごとし。松のみどりこまやかに、枝葉、汐風に吹たはめて、屈曲をのづから、ためたるがごとし。其気色窅然として、美人の、顔を粧ふ。千早振神のむかし、大山ずみの、なせるわざにや。造化の天工、いづれの人か、筆をふるひ、詞を尽さむ。

雄嶋が磯は地つづきて、海に成出たる島也。雲居禪師の別室の跡、坐禅石など有。将、松の本陰に、世をいとふ人も、稀々見え侍りて、落ぼ、松笠など、打煙たる、草の庵、間に住なし、いかなる人とはしられずながら、先なつかしく立寄ほどに、月海に移りて、昼のながめ、又あらたむ。

江上に帰りて、宿を求めば、窓を開、二階

を作りて、風雲の中に旅寐するこそ、あやし
きまでたへなる心地はせらるれ。

松嶋や鶴に身をかれほととぎす 曾良

予は、口をとぢて、眠らんとして、いねら
れず。旧庵をわかるる時、素堂、松嶋の詩有。
原安適、松がうらしまの和歌を送らる。袋を
解て、こよひの友とす。且、杉風、濁子、癸
句あり。

【語釈・語り】

雄嶋の磯に着くまでの船上からの光景。舟
が進むにつれて変化する景観を描写。扶桑日
本。好風よい景色。をよそおそらく。数を尽
して全てを集めて。置て積み重なる。筆絵筆。
移り映りとも。真筆の移りをとった。たへな
る妙なる。口をとぢて句を詠むのを断念して。
詩漢詩。

【現代語訳】

そもそも、松島は、日本一の美景で、おそ
らく、洞庭、西湖と比べても恥じることはな
い。

東南より、海を入れて、湾の中は三里あり、
浙江のように、潮を湛えている。島々のある
限りを集めて、聳つものは天を指し、伏すも
のは波に腹這っている。あるいは二重にかさ

なり、三重に置まれ、左に分かれ、右に連な
っている。背負うものあり、抱くものあり。
子や孫を愛しているようだ。松の緑は色濃く、
枝葉は、潮風に吹き曲げられ、屈曲は自然の
ままに、誰かが美しく曲げたようだ。その風
情は見る人を恍然とさせ、美人が、顔を化粧
したようだ。千早振神の昔、大山祇神が、
なされた仕業なのだろうか。造物主の天の仕
業を、誰が、筆をふるい、言葉を尽くすこと
ができればうか。

雄鳩が磯は地つづきに、海に突き出した鳥
である。雲居禪師の別室の跡や、坐禪石など
がある。又、松の本陰に、隠棲している人の
姿も、ごく希に見え、落穂、松笠などの炊事
の煙が、うっすらと煙っていて、草の庵に、
閑静に住みなしている様子、どのような人と
は知らないながら、何より先に心をひかれて
立ち寄るうちに、月は海に移り、昼の眺めが、
すっかり変わった。

海辺に帰って、宿を求めると、海に面して
窓を開いた、二階作りで、風雲の中に旅寝す
るのは、不思議なほど妙なる気持がするのだ
った。

松嶋や鶴に身をかれほととぎす

曾良

予は、口を閉じて、眠ろうとするが、眠る
ことができない。芭蕉庵を離れる時、素堂が、

松島の詩を作ってくれた。原安適は、松が浦島の和歌を贈ってくだされた。袋の紐を解き、今宵の友とする。それに加えて、杉風、濁子の発句があった。

二十三 瑞岩寺 目次へ

【原文】

十一日、瑞岩寺に詣。当寺、三十二世の昔、真壁の平四郎、出家して入唐、帰朝の後、開山す。其後、雲居禪師の徳化に依て、七堂、躉改りて、金壁莊嚴、光を輝、仏土成就の大伽藍とはなれりける。彼見仏聖の寺は、いづくにやと、したはる。

【語釈・語り】

莊嚴 仏像や仏堂を飾ること、またその装飾具（莊嚴具）。

【現代語訳】

十一日、瑞岩寺に参詣する。この寺の三十二代目の昔、真壁の平四郎が、出家して唐に渡り、帰朝の後開山した。其後、雲居禪師の徳化によりて、七堂の躉が改築され、金色の壁や仏像の飾りを光り輝かせ、仏の住む世界の現出した大伽藍となったのである。又、かの見仏聖の寺は、何処にと慕われる。

【原文】

十二日、平和泉と、心指、あねはの松、緒だえの橋など、聞伝えて、人跡、稀に、雉兔、**菊薨**の往かふ道、そこ**共わかず**。終に、道ふみたがえて、石の巻といふ湊に出。「こがね花咲」と、よみて奉りたる金花山、海上に見渡、数百の廻船、入江につどひ、人家、地をあらそひて、竈のけぶり立つげたり。「おもひがけず、かかる処にも、来れる哉」と、宿からんとすれど、**更宿**かす人なし。漸々、まどしき小家に一夜をあかして、明けば、又しらぬ道まよひ行。袖の**わたり**、尾ぶちの牧、まののかわはらなど、よそめにみて、**はるかなる堤**を行。心**ぼそき**長沼にそふて、戸伊摩と云所に一宿して、平泉に至る。其間二十余里程と覺ゆ。

【語釈・語り】

菊薨樵。わかず分ず。更どこにも。**わたり**渡し。はるかなる果てしない。心**ぼそき**（何処まで続くのかと）。

【現代語訳】

十二日、平泉へと心に決め、あねはの松、緒だえの橋などを、人づてに聞いて、人跡希で、獵師や樵の行き交う道に、どことも見分

けがつかない。ついに、道を間違えて、石の
巻まきと云う湊みなとに出た。大伴家持が「こがね花
咲さく」と、詠んで帝に奉たてまつった金花山きんかざんを海上に
見渡し、一方、数百の廻船かいせんが、湾内に集まり、
人家が地を争って、竈かまどの煙が立ち続けている。
「思いがけず、このような処ところに来てしまった
なあ」と、宿を借りようとするのだが、どこ
にも宿を貸す人はない。やっと、貧しい小さ
な家で一夜を明かして、明ければ、又知らない
い道を迷い行く。袖そでの渡り、尾ぶちの牧まき、真
野のの萱原かやはらなどを、よそ目に見て、遙かに続く
堤つつみを行く。どこまで続くのかと心細い長い沼
に沿って行き、戸伊摩といまと云う所に一泊して、
平泉ひらいずみに着いた。その間、二十余里ほどと思わ
れた。

二十五 平泉ひらいずみ

[目次へ](#)

【原文】

三代の栄耀えいよう、一睡いつすいの中にして、大門だいもんの跡は、
一里いちりこなたに有あり。秀衡ひでひらが跡は、田野でんやになりて、
金鶏山きんけいざんのみ形かたちを残す。

先まず、高館たかたちにのぼれば、北上川、南部より流
るる大河也。衣川ころもがわは、和泉いずみが城をめぐりて、
高館の下したにて大河に落入おちいる。泰衡等やすひららが旧跡は、
衣が関へだてを隔て、南部なんぶ口ぐちを指さしかため、えぞをふ
せぐと見えたり。扱さても、義臣ぎしんすぐつて此城このじやうに
籠り、功名こうめい、一時いつときの草村くさむらとなる。「困破れて山

河あり、城春にして青々たり」と、笠打敷て、
時のうつるまで、なみだを落し侍りぬ。

夏艸や兵 共が夢の後

卯花に兼房みゆる白毛哉 曾良

兼て耳驚したる二堂、開帳す。経堂は三
将の像を残し、光堂は三代の棺を納、三尊
の仏を安置す。七宝散うせて、玉の扉、風
破れ、金の柱、霜雪に朽て、既、頽廢空虚の
草村となるべきを、四面、新に圍て、薨を
覆て風雨を凌、暫時、千歳の記念とはなれり。

五月雨や年々降て五百たび

螢火の昼は消つ々柱かな

【語釈・語り】

功名（主従の過去の）功名。暫時少しの間。
千歳と対をなす。

【現代語訳】

三代の栄華も一睡の中で、表門の跡は、一
里も手前にある。秀衡の館跡は、田野になっ
て、金鶏山のみが形を残している。

何よりも先に、義経ゆかりの高館に登ると、
北上川は、南部藩の領地から流れてくる大河

である。衣川は、和泉が城の周りを流れ、高館の下で大河に落ちる。泰衡達の屋敷跡は、衣が関を隔てた処にあり、南部口を堅く守り、蝦夷を防いだと見られる。さても、義経が義臣を選びすぎりこの高館の城に籠り、(過去に)競った功名も、一時の夢と消え、(過去)「国破れて山河あり。城春にして青々たり」と、笠を敷いて腰を下ろし、時の移るまで、涙を落とした。

夏草や兵共が夢の跡

卯の花に兼房みゆる白毛哉

曾良

かねてから聞いて驚嘆していた二堂を、開帳する。経堂は三将の像を残し、光堂はこれら三代の棺を納め、三尊の仏を安置する。七宝は散り失せて、珠玉の扉は、風に破れ、金の柱は、霜雪に朽て、もはや、頽廢空虚の叢となる筈だったのを、四面を新たに囲んで、藁を覆いて風雨を凌ぎ、暫くは、千載の記念となっている。

五月雨や年々降て五百たび

螢火の昼は消つ々柱かな

西村本

五月雨の降りふりのひかりどうつてや光堂

二十六 尿前しとまえ 目次へ

【原文】

南部道なんぶみちはるかに見やりて、岩手の里いわでに泊る。
小黒崎おぐろさき、水みずの小嶋こじまを過すぎて、なるごの湯より、
尿前しとまえの関せきにかかりて、出羽の関せきに、越こえむとす。
此道このみち、旅人たびびと稀まれなる処ところなれば、関守せきもりにあやしめ
られて、漸ようようにして関せきをこす。大山たいざんをのぼつ
て、日既ひすで暮くれければ、封人ほうじんの家いえを見かけて、舎やどり
を求もとむ。三日みつか風雨ふううあれて、よしなき山中さんちゆうに還とう
留りゆうす。

蚤虱馬のみしらみの尿ばりする枕まくらもと

あるじの云いわく、「これより出羽でわの関せきに、大山たいざん
を隔へだてて、道みちさだかならざれば、道みちするべの人ひと
を頼たのみて越こゆべき」よしを申もうす。「さらば」と云い
て、人ひとを頼たの侍まはれば、究竟くつきようの若わかもの、脇指わきさしをよ
こたえ、櫛かしの杖つえを携たずさえて、我々われわれが先たちに立たち行ゆく。
「けふこそ、必かならずあやうきめにも、あふべき
日ひなれ」と、幸からきおもひをなして、後うしろについ
て行ゆく。あるじの云いわくにたがはず、高山こうざん森々しんしんとし
て一鳥いつちよう声こゑきかず、本こゝの下した闇やみ、茂しげりあひて、夜よる
行いくがごとし。雲端うんたんに土こゝちふる心地こゝちして、篠しのの中なか、
踏ふみ分わけ々ふみわけ、水みづをわたり、岩いわにつまづいて、肌はだえに
つめたき汗あせを流ながして、最上もがみの庄しやうに出いず。彼かの、

案内あないせし、おのこの云いうやう、「この道みち、必かならず、
不用ふようの事こと有あり。つつがなう送りまいらせて、仕し
合あしたり」と、よろこびてわかれぬ。跡あとに聞き
てさへ、胸むねとどろくのみ也なり。

「語釈・語り」

「南部なんぶ道みちはるかに見やりて」にはもつと北へ
行きたかった気持が込められている。旅は日
本横断、宮城から山形への越境へと。封人ほうじん国
境を守る役人。よしなき（歌枕もない）。

「現代語訳」

北の方南部地方へと続く街道を遙かに眺め
やりつつ、岩手の里に泊まる。小黒崎、美豆
の小嶋を過て、鳴子の湯より、尿前の関にさ
しかかって、出羽の国へ越えようとする。こ
の道は、旅人が希な処だから、関守せきもりに怪しま
れ、やっこのことと関を越えた。大山たいざんを登っ
ていくうち、日はすでに暮れたので、国境くにさかいの
番人の家を目当てに、宿りを求めた。三日間
風雨が荒れて、つまらない山中に逗留とうりゆうする。

蚤虱馬の尿する枕まくらもと

あるじ
主あるじが云うには、「ここから出羽の国までには、
大きな山が間にあり、道もはつきりして
いないので、道案内の人を頼んで越えるべき
です」との旨を申す。「それならば」と云って、

人を頼むと、くつきょう 屈強な若者が、わきざし 脇差を横たえ、
櫛の本を携えて、たずさ 我々の先に立って行く。
「今日こそ、きつとあぶない目にあう日だ」
と、悲痛な思いで、後ろについて行く。あるじ 主の
云ったことに違わず、たが 高山は森々として、鳥
の声一つ聞こえず、本の下闇は、生い茂りあ
って、夜道を行くようだ。とほ 杜甫の「雲端に土
降る」心地がして、さき 笹藪を踏分踏分、ふみ 水を渡
り、岩につまずいて、冷や汗を流して、もがみ 最上
の庄に出た。しやう あの、案内してくれた男が云う
には、「この道では、必ずよくないことがあります
ます。何もなくお送りできて、幸いでした」
と、喜んで別れていった。後になって聞いて
さえ、胸がどきどきするばかりだった。

二十七 おばなざわ 尾花沢 目次へ

【原文】

おばなざわ 尾花沢にて、せいふう 清風と云ものを尋ぬ。かれは、
とめ 富るものなれども、心ざし、さす さすがにやし
からず。みやこ 都にも折々かよひて、じやう 旅の情をもし
りたれば、ひごろ 日比とどめて、ちやうど 長途のいたはり、
はべ さまざまにもてなし侍る。

涼しさを我宿にそねまる也

這出よかひやが下のひきの声

まゆはきをおもかけを倅に紅粉の花はな

蚕飼こがいする人は古代こだいの姿すがた哉かな

曾良

【語釈・語り】

「**さすが**に旅じようの情じやうを」と改稿けいこうしている。「**さ**
すがに**い**やしからず」は**さすが**に現代語訳し
にくかった。**日比**ひごろ何日なにじつも。

【現代語訳】

尾花おぼなざわ沢ざわで、清風せいふうと云うものを訪ねた。彼は、
裕福こころざしだが、志こころざしは、そうはいつでもやはり卑し
さが無い。都にも時々行き来して、旅の心情を
知っているの、何日も引き留めて、長い道中
をねぎらい、色々ともてなしてくる。

涼なごしさをわがやど我宿わがやどになりてなまる也なり

這出はいいでよかひやが下のひきの声こえ

まゆはきをおもかけを倅に紅粉の花はな

蚕飼こがいする人は古代こだいの姿すがた哉かな

曾良

二十八 りゆうしやくじ 立石寺 [目次へ](#)

【原文】

山形領りゆうしやくじに、立石寺りゆうしやくじと云山寺いんやまでら有あり。慈覚大師じかくだいしの

開基にして、殊清閑の地也。一見すべきよし、人々のすすむるに仍て、尾花沢より、とつて返し、其間七里計也。日、いまだ暮ず。麓の坊に宿かり置いて、山上の堂に登。岩に巖を重ねて山とし、松柏は年代を経て、土石も老いて、苔が滑らかで、岩の上の多くの支院は扉を閉じて、物の音一つ聞こえない。絶壁を廻り、岩を這って、仏閣を拝めば、佳景は、寂寞として、心が澄んで行くのだけが感じられる。

閑さや岩にしみ入蟬の声

【語釈・語り】

とつて返し引き返し。院々本寺に属する寺院。崖。英訳する時に蟬は単数か複数か問題になるそうです。

【現代語訳】

山形領に立石寺と云う山寺がある。慈覚大師の開基で、とりわけ清閑な地である。一見すべしと、人々が勧めるので、尾花沢から引き返したが、その間は七里ほどであった。日はまだ暮れていない。麓の宿坊に宿を借りておいて、山上の堂に登る。岩に巖を重ねて山とし、松柏は年代を経て、土石も老いて、苔が滑らかで、岩の上の多くの支院は扉を閉じて、物の音一つ聞こえない。絶壁を廻り、岩を這って、仏閣を拝めば、佳景は、寂寞として、心が澄んで行くのだけが感じられる。

閑さや岩にしみ入蟬の声

二十九 最上川 目次へ

【原文】

もがみ川乗らんと、大石田と云処に、日和を待。爰に、古き俳諧のたね、落こぼれて、わすれぬ花のおかしをしたひ、芦角一声の心をやはらげ、此道にさぐりあしして、新古ふた道にふみまよふといへども、道しるべする人しなればと、わりなき一卷を残しぬ。このたびの風流、爰にいたれり。

最上川は、みちのくより出て、山形を水上とす。ごてん、はやぶさなど云、おそろしき難所有。板敷山の北を流て、果は、酒田の海に入。左右、山おほひ、茂みの中に船を下。これをいなふねと云。白糸の滝は、青葉の隙々に落て、仙人堂、岸に臨て立。水みなぎつて、舟あやうし。

さみだれをあつめて早し最上川

【語釈・語り】

乗らんと舟に乗ろうと。

ここは難しいです。主語を補います。(大石田の人は) わすれぬ花の。(俳諧は) 芦角一声の。(大石田の人は) 此道に。しは強調。わり

なきやむにやまれず。いなノン。「もがみ川の
ぼればくだるいな舟のいなにはあらず此月ば
かり」古今集。いやではないが今月は待って
欲しい。芭蕉は古今集を洒落ています。

【現代語訳】

最上川を舟で下ろうと、大石田というところ
で日和を待つ。かってこの地に、古い俳諧
の種が落ちこぼれ、それが実って、盛んに詠
まれた忘れられない花の昔を慕い、葦笛の響
きのような田舎人の心を和らげつつ、俳諧の
道に探り足をして、新旧二つの俳諧の道に踏
み迷っているのだが、指導する人もいないの
で、是非にということ、やむにやまれず一
巻を残した。この度の俳諧風流は、この一巻
に極まったかの感がある。

最上川は、陸奥より出て、山形領を上流と
する。碁点、隼などと云う、恐ろしい難所
がある。板敷山の北を流れて、果は、酒田の海
に入る。左右は山が覆い、茂みの中に船を下
す。これを縮舟と云う。白糸の瀧は、青葉の
隙間隙間に落ちて、仙人堂は、川岸に臨んで
建っている。水はみなぎって、舟は危ない。

さみだれをあつめて早し最上川

【原文】

六月三日、羽黒山に登る。因司左吉と云も
のを尋て、別当代会覚阿闍梨に謁す。南谷の
別院に舎して、憐愍の情こまやかに、あるじ
せらる。

四日、於本坊、俳諧興行。

有難や雪をかほらす南谷

五日、権現に詣。当山開闢、能除大師は、
いづれの代の人と云事をしらす。延喜式に、
「羽州里山の神社」と有。書写、「黒」の字、
誤て「里山」となせるにや。「羽州黒山」を
中略して、「羽黒山」と云にや。月山、湯殿を
合て、三山とす。当寺、武江東叡に属して、
天台止観の月明らかに、因頓融通の法の燈
かかげそひて、僧坊、棟をならべ、修験行法
を勵し、靈山靈地の校験、人貴、且、恐。
繁栄長にして、日出度御山と可謂。

八日、月山に登に、本綿しめ身に引かけ、
宝冠に頭を包、強力と云ものに道びかれて、
雲霧山気の中に、氷雪を踏て、のぼる事八里、
更に、日月行道の雲関に入かとあやしまれ、
息絶、身こごえて、頂上に至れば、日没て、
月あらはる。笹を鋪、篠を枕として、卧て、
明るを待。日出て、雲消れば、湯殿に下る。
谷の傍に、鍛冶小屋と云有。此国の鍛冶、

霊水を撰て、爰に潔斎して、劔を打、終、
月山と銘を切て、世に賞せらる。彼、竜泉に
劔を淬とかわ、干将莫耶の昔をしたふ。道
に堪能の、執あさからぬ事、しられたり。岩
に腰かけて、しばしやすらふ程、三尺計なる
桜の、つぼみ半にひらけるあり。ふり積雪の
下に埋て、はるを忘れぬ遅桜の花の心、わ
りなし。炎天の梅花、爰にかほるがごとし。
行尊親王の歌の哀も、増りて覚ゆ。惣而、此
山中の微細、行者の法式として、他言する事
を禁ず。仍て、筆をとどめて、しるさず。
坊に帰れば、阿闍梨の求に仍て、三山順礼
の句々、短尺に書。

涼しやほの三か月の羽黒山

雲の峯幾つ崩て月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂哉

湯殿山銭ふむ道のなみだ哉

曾良

〔語釈・語り〕

権現 羽黒権現。しらず分らない。鍛冶
小屋頂きから西へ300㍍ほど下ったところにあ
った小屋。谷と言うので麓や低い場所を想像
したが、まだ、高山である。桜高山帯に咲く
高嶺桜（ミネザクラ）。遅桜の生命力。

【現代語訳】

六月三日、羽黒山に登る。因司左吉という者を訪ねて、別当代会覚阿闍利に拜謁する。南谷の別院に宿泊して、あわれみの情細やかに、持てなしてくださった。

四日、本坊で、誂諧興行。

有難や雪をかほらす南谷

五日、羽黒権現に参詣する。当山開山の能除大師は、いつの時代の人が明らかでない。延喜式に、「羽州里山の神社」とある。書写の際に、「黒」の字を、間違つて「里山」としたのだらうか、「羽州黒山」を中略して、「羽黒山」と云うのだらうか。月山、湯殿を合て、三山とする。この寺は、武蔵国江戸の東叡山に属して、天台宗の止観の教えが曇りなき月のように行き渡り、因頓融通の法統を盛んに継承して、僧坊が、棟を並べ、修験者が、行法に励み、霊山霊地の効験を人は貴び、かつ、畏れる。繫宗は永遠で、日出度御山というべきである。

八日、月山に登るのに、本綿注連を首にかけ、宝冠で頭を包み、強力と云う者に先導されて、雲や霧の立ちこめる山気の中、氷雪を踏んで、登ること八里、まさに、日月の運行

出入りする雲の関所に入ったのかと怪しく、
息も絶え絶えに、冷え切った身体で、頂上に
到着すると、日は没し、月が現れた。笹を敷
き、篠を枕として、横になって、夜が明ける
のを待つ。日が出て、雲が消えたので、湯殿
山へと下る。

途中、谷の一隅に、鍛冶小屋と云う所があ
る。この国の刀鍛冶が、霊水を選び、この地
に心身を清めて、剣を打ち、ついに、月山と
銘を刻み、世に賞賛された。かの、龍泉の水
を選んで剣を鍛えた故事に通じるものだろう
か、干将と妻莫耶の昔を慕うものであり、道
を究める堪能の執念が浅からぬことが分かる。
岩に腰かけて、しばらく休んでいると、三尺
ほどの桜の蕾が、半分ほど開いていた。降り
積もる雪の下に埋もれても、春を忘れない
遅桜の花の心は、やむにやまれぬものがある。
禅宗の炎天の梅花が、ここに香っているかの
ようだ。行尊親王の歌の心も、よりしみじみ
と感じられる。全て、この湯殿山中での細か
いことは、行者の掟として、他言することを
禁じている。よって、筆を留めて、記さない。
宿坊に帰れば、阿闍梨の求めによって、三
山順礼の句々を、短尺に書く。

涼しややほの三か月の羽黒山

雲の峯幾つ崩れて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂哉 たもと

湯殿山ゆどのさん銭ぜにふむ道のなみだ哉

曾良 そら

三十一 酒田 さかた 目次へ

【原文】

羽黒はぐろを立たちて、鶴つるが岡おかの城下じょうか、
云いうものふの家いえにむかへられて、
左吉さきちも、共ともに送りぬ。川舟かわぶねに乗のりて、酒田さかたのみ
なとに下くだる。淵庵えんあん不玉ふぎよくと云いう医師いしの許もとを宿やどとす。

あつみ山やまや吹浦ふくうらかけて夕ゆふすずみ

暑あつき日ひを海うみに入いれたる最上もがみ川がわ

【語釈・語り】

左吉さきち前段さきちの図司ずし左吉さきち。ついてきていたので
すね。

【現代語訳】

羽黒はぐろを立たちて、鶴つるが岡おかの城下じょうかの、
と云いう武士ぶしの家いえに迎むかえられて、
く。佐吉さきちも、一いっ緒しょに送おくつてくれた。川舟かわぶねに乗のり
って、酒田さかたの湊みなとに下くだる。淵庵えんあん不玉ふぎよくと云いう医師いし
の家いえを宿やどとする。

あつみ山やまや吹浦ふくうらかけて夕ゆふすずみ

暑き日を海に入れたる最上川

西村本

暑き日を海に入れたり最上川

三十二 象潟 目次へ

【原文】

江山水陸の風光、数を尽して、今、象潟に
方寸を責。

酒田の湊より、東北の方、山を越、礮をつ

たひ、いさを踏で、其際十里、日影ややか

たぶく比、夕風、真砂を吹上、雨、朦朧とし

て鳥海の山かくる。闇中に莫作して、「雨も

又、奇也」とせば、「雨後の晴色、又頼母

敷」と、蚤の苦屋に膝をいれて、雨の晴るる

を待。

其朝、天能晴れて、朝日花やかにさし出る

程に、象潟に舟をうかぶ。先、能因嶋に舟を

よせて、三年幽居の跡をとぶらひ、むかふの

岸に舟をあがれば、「花の上こぐ」とよまれし

桜の老本、西行法師の記念を残。江上に御陵

あり。神功皇宮の御墓と云。寺を干満珠寺と

云。この処に御幸ありし事、いまだきかず。

いかなる故ある事にや。

此寺の方丈に坐して、簾を捲げ、風景、一

眼の中に尽て、南に、鳥海、天をささへ、

其陰うつりて 江に有。西は、むやむやの関
路をかぎり、東に、堤を築て、秋田にかよふ
道遙に、海北にかまへて、浪打入る処を汐
ごしと云。江の縦横、一里ばかり、倅松嶋
にかよひて、又異なり。松しまは、わらふが
ごとく、象潟は、うらむがごとし。さびしさ
に、かなしびをくはえて、地勢、魂をなや
ますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

祭礼 曾良

象潟や料理何くふ神祭

美濃国商人低耳

蚕の家や戸板を敷て夕涼

岩上に雉鳩の巢を見る 曾良

波こそぬ契ありてやみやごの巢

「語釈・語り」

方寸心臓（こころ）。いさご砂。「浜のいさ

ご云々」って聞いたことがあるような。際間。

今の象潟は水田に丘が点在している。うらむ

悲しむ。

象潟きさや雨がたに西施せいしがねぶの花

おくのほそ道で私の一番好きな俳句です。
何でだろ？ **に**と**が**が何とも言えません。

【現代語訳】

江山こうざん水陸すいりくの美景の、ある限りを見て来て、
今や、象潟きさに詩心ししんを苦しめる。

酒田の湊みなとから、東北の方へ、山を越え、磯いそを伝い、砂を踏んで、その間十里、日もようやく傾く頃、潮風が砂を吹き上げ、雨は、朦朧ろうろうとけぶって、鳥海ちようかいの山も隠れてしまった。闇中あんちゆうに模索もさくして、「象潟きさの雨もまた奇なり」とすれば、「雨後の晴れた景色は、又期待される」と、漁師の苦とまぶきの小屋に膝ひざを入れるようにして、雨が上がるのを待つ。

その翌朝、空はよく晴れて、朝日がはなやかにさし出る頃に、象潟きさに舟を浮かべた。何はともあれ、能因嶋のういんじまに舟をよせて、能因法師のういんほうしが三年間隠栖いんせいした跡を尋ね、向こうの岸に舟を上がれば、「花の上こぐ」とお詠みになった。桜の老本おいきが、西行法師さいぎようほうしの記念かたみを残している。水辺に御陵みささぎがある。神功后宮じんぐうこうごうの御墓みはかと云う。寺を干満珠寺かんまんじゆじと云う。ここに皇后こうごうが御幸みゆきされたことは、聞いたことがない。どういういわれがあるのだらうか。

この寺の方丈ほうじように坐して、簾すだれを卷けば、風景は、一望のうちに尽きて、南に、鳥海山が、

天を支えるように聳え、その影が映って、水上にある。西には、おやおやの関が道を遮り、東は、堤を築いて、秋田に通う道が遙かに続き、海を北に控えて、波が打ち越して入る所を汐越と云う。入江の縦横は、一里ほどで、倅は松島に似通っていて、また異なっている。松島は笑うが如く、象潟は憂える如し。寂しさに、悲しみを加えて、その地のありさまは、心を悩ます美女の姿に似ている。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

祭礼

曾良

象潟や料理何くふ神祭

美濃国商人低耳

蚕の家や戸板を敷て夕涼

岩上に雉鳩の巢を見る

曾良

波こそぬ契ありてやみさごの巢

三十三 越後

[目次へ](#)

【原文】

酒田の余波、日を重て、北陸道の雲に望。
遙々のおもひ、胸をいたましめて、加賀の府
まで百三十里と聞。鼠の関をこゆれば、越後
の地に歩行を改めて、越中の国、一ぶりの関
に至。此間九日、暑湿の勞に神をなやまし、
病をこりて、事をしるさず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によくらふ天河

【語釈・語り】

帰り道は遠かった。

【現代語訳】

酒田の名残惜しさに、日を重ねていたが、
北陸道の雲に向かつて旅立つ。前途は遙かに
遠いという思いが、心を悲しませ、加賀の国
府まで百三十里と聞く。鼠の関を越えらると、
出羽の国から越後の地へと歩を改めて、越中
の国、市振の関に着いた。この間九日、暑さ
と雨の苦勞に心氣を疲れさせ、病氣が起こつ
て、道中の出来事を記さず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によくらふ天河

【原文】

けふは、親しらず、子しらず、犬もどり、
駒返しなど云、北国一の難所を越て、つかれ
侍れば、枕引よせて寝たるに、一ひと間隔まへだてて面おもて
の方に、若きをんなの声、二人計ふたりばかりときこゆ。
年老たるおのこの声も交まじりて、物語するをきけ
ば、越後の国新潟と云処いうところの、遊女成なりし、伊勢
に参宮するとて、此関までおのこの送りて、
あすは右里にかへす文ふみしたため、はかなき言こと
伝づてなどしやる也。「白浪のよする江なぎさに身みをは
ふらかし、あまのこの、世をあさましよう下くだり
て、定めなき契ちぎり、日々の業因ごういん、いかにつたな
し」と物云いうを、聞く聞く寝入ねいりて、あした旅たびだ
つに、我々におかひて、「行来ゆくすえしらぬ旅路たびじのう
さ、あまり覚束おぼつかなう、悲しく侍れば、見えか
くれにも、御跡おんあとをしたひ侍らん。衣ころもの上うえの
御情おんなさけに、大慈だいじのめぐみをたれて、結縁けちえんせさせ
給へ」と、なみだを落す。不便ふびんの事には、お
もひ侍れ共ども、「我々は、所々ところどころにて、とどまる
方かたおほし。唯かならず、人の行ゆくにまかせて行ゆくべし。神しん
明めいの加護かご、必かならずつつがなかるべし」と云捨いひすてて
出いでつつ、あはれさ、しばらくやまざりけらし。

一家ひとついえに遊女ゆうじよも寝ねたり萩と月

曾良にかたれば、書かきとどめ侍はべる。

【語釈・語り】

けふは市振の関に着いた日。一ひと間ま襖ひとえ一重ひとえ也。伝聞推定の助動詞。

【現代語訳】

今日は、親知らず、子知らず、犬戻り、駒返こまがえしなどという、北国ほくこく一の難所を越えて、疲れたので、枕を引き寄せて寝たところ、襖ふすま一重隔ひとえてた表の方で、若い女の声、それも二人と思われる声が聞こえる。年老いた男の声も交まじりって、話し合うのを聞くと、越後えちごの国新潟にいがたと云う所の遊女で、伊勢に参宮するので、この関まで男が送こつてきて、明日あすはその男に託たくける右里なぎさに返す手紙を書き、とりとめもない伝言でんごんなどしてやっているようだ。「白浪が打ち寄せる汀なぎさに身を投げ捨て、漁師の子のように、この世を情けない境遇に落ちぶれ果てて、夜毎よごとに変わるはかない契り、毎日毎日の前世の因縁いんねんは、どんなに悪かったのだろう」と、話を聞ききながら眠り、翌朝旅立つ際に、我々われらに向むかかって、「行く先さきも分からない旅の心細さ。あまりに不安で、悲しゅうございますので、見え隠れにも、御跡おあとについて行きとうございます。法衣ほうえをお召しのお情けに、御仏みほとけの大慈だいじのお恵みをお分かち下されて、仏縁を結ばせてください」と涙を落とす。かわいそうなことと思おもったけれど、「我々は、あちこちに、逗留する先も多おほい。ただ、同じ方向に旅

する人々の行くのにまかせて行きなさい。伊勢大神宮の加護で、きつと無事に着くでしょう」と言い捨てて出発したものの、哀れさが、しばらくやまないことだった。

ひとついえ
一家に遊女も寝たり萩と月

西村本
ひとつや
一家に遊女も寝たり萩と月

そら
曾良に語れば、書きとどめた次第である。

三十五 那古 目次へ

【原文】

「くろべ 四十八ヶ瀬」とかや、数しらぬ川を
わたりて、那古と云浦に出。担籠の藤浪は、
春ならず共、「初秋のあはれとふべきものを」
と、人に尋れば、「是より五里、磯づたひし
て、むかふの山陰に入、蚤の芦ぶき、かすか
なれば、一夜の宿かすもの、あるまじ」と、
云おどされて、かがの国に入。

わせの香や分入右は有そ海

【語釈・語り】

かすか粗末。

【現代語訳】

黒部四十八が瀬とかいう、数も知れぬほどの川を渡って、那台と云う海辺に出た。担籠の藤浪は、春でなくても、「初秋の趣は尋ねるべきものを」と、人に聞いてみると、「ここから五里、磯伝いに行つて、向こうの山陰に入ったところで、漁師の芦ふきの小屋が、粗末なものだから、一夜の宿を貸す者はありませんよ」とおどかさされて、加賀の国に入る。

わせの香や分入右は有磯海

三十六 金沢 目次へ

【原文】

卯の花山、くりからが谷をこえて、金沢は、七月中の五日也。爰に、大坂よりかよふ商人、何処と云ものあり。それが、旅宿をとみにす。一笑と云ものは、此道にすける名の、ぼのぼの聞へて、世に知人も侍しに、去年の冬、早世したりとて、其兄、追善を催に、

塚もうぐけ我泣声は秋の風

ある草庵にいざなはれて、

秋すずし手毎にむけや瓜茄子

途中吟

あかあかと日は難面も秋の風

小松と云処にて

しほら(き)名や小松吹萩薄

【語釈・語り】

すける好ける。熱心。名評判。ほのぼのほのかに。知人知人。

【現代語訳】

卯の花山や、俱利伽羅が谷を越えて、金沢に着いたのは、盆の七月中の五日であった。この地に、大坂から通っている商人で何處と云う者がいる。かれの、旅宿に同宿した。

一笑と云う者は、俳諧の道に熱心だという評判が、いささか知れていて、世に知友もいたのだが、去年の冬に早世してしまったので、その兄が、追善の句会を催したので、

塚もうごけ我泣声は秋の風

ある草庵に誘われて、

秋すずし手毎にむけや瓜茄子

途中の句

あかあかと日は難面も秋の風

小松と云処にて

しほら(き)名や小松吹萩薄

三十七 太田の神社 目次へ

【原文】

此所、太田の神社に詣。斎藤別当真盛が甲、錦の切あり。其昔、源氏に属せし時、義朝公より給はらせ給とかや。げにも、平士のもにあらす。目庇より吹返しまで、菊から艸のほりもの、金をちりばめ、竜頭に鍬形打たり。真盛討死の後、本曾義仲、願状にそへて、此社に、こめられ侍るよし、樋口の次郎が、使せし事共、まのあたり、縁起に見えたり。

むざんやな甲の下のきりぎりす

【語釈・語り】

下(の薄暗がりのあたりの)。甲に閉じ込められていると思っていた人はいませんか？俺だけか……。

【現代語訳】

この地の、太田の神社に参詣した。斎藤別当真盛の甲と、錦のきれはしがある。その昔、源氏に属していた時、義朝公より下賜され給うたとか。いかにも平士のものではない。

目尻から吹返しまで、菊唐草模様きくからくさもようの彫りものに、金をちりばめ、龍頭たつがしらに鋏形がたが打ってある。真盛さねもりの討死うちじにの後、本曾義仲きよなかが、戦勝祈願状せんしょうぎげんじょうに添えて、この社やしろに奉納されたということ。樋ひ口の次郎じろうが、その使者しやとなったことなどが、まざまざと、縁起えんぎに記しるされている。

むぎんやな甲かぶとの下のきりぎりす

三十八 那谷 目次へ

【原文】

山中やまなかの温泉いでのゆに行ゆくほど、白根しらねが嶽たけ、跡あとに見みなしてあゆむ。左ひだりの山際やまぎわに観音堂くわんおんどう有あり。花山かざんの法ほう皇おう、三十三さんじゅうさん所の順礼じゆんれいとげさせ給たまひて後のち、大慈だいじ大悲だいひの像ざうを安置あんぢし給たまひて、那谷なたと名付なづけ給たまふと也なり。那智なち、谷汲たにくみの、二字ふたごをわかち侍はべりしとぞ。奇石きせきさまざまに、右松みぎしょう植うゑならべて、萱かやぶきの小堂しょうどう、岩いわの上に造りかけて、殊勝しゆしょうの土地とち也なり。

石山の石より白し秋の風

【語釈・語り】

三十三所の順礼の一番は那智。一番だけ参りました。

【現代語訳】

山中の温泉に行く途中、白根が嶽を後方に

見るように歩む。左の山際に観音堂がある。
花山の法皇が、三十三所の順礼を果たされた
後、大慈大悲の観世音菩薩の像を安置され、
那谷と名づけられたということである。那智
と谷汲の二字を分けて命名されたという。
石をさまざまに積み、老松を植え並べて、萱
ぶきの小堂を、岩の上に懸造にして、殊勝の
土地である。

石山の石より白し秋の風

三十九 山中 目次へ

【原文】
温泉に浴す。其功、有間に次と云。

山中や菊はたをらぬ湯の匂

あるじとするものは、久米之助とて、いま
だ小童也。かれが父、俳諧を好て、洛の貞室、
若輩のむかし爰に來りし比、風雅に辱られ
て、洛に歸りて、貞徳の門人となつて、世に
しらる。功名の後、此一村、判詞の料を請ず
と云。今更、むかし物がたりとはなりぬ。
曾良は、腹を病て、伊勢の国、長嶋と云
処に、ゆかりあれば、先立て旅立行に、

ゆきゆきと倒れ伏すとも萩の原 曾良

と書置たり。行ものの悲しみ、残るもののうらみ、隻鳧のわかれて、雲にまよふがごとし。予も又、

けふよりや書付消さん笠の露

【語釈・語り】

風雅俳諧。辱られ「あれ、字余りでん
な」とか。うらみ残念さ。

【現代語訳】

温泉に浴する。その効能は、有馬に次ぐと云う。

山中や菊は手折らぬ湯の匂

泊まっている宿の主は、久米之助といい、まだ少年である。彼の父は、俳諧を好み、京の貞室が、若輩の昔この地にやって来た頃、この父親に俳諧上の辱めを受け、京に帰って、貞徳の門人となり、世に知られるようになった。名をなした後も、この一村からは、俳諧の指導料を申し受けなかったという。今となつては、昔話になったが。

曾良は腹を病んで、伊勢の国の長嶋と云う所に、縁故があるので、先に旅立つにあたり、

ゆきゆきと倒れ伏すとも萩の原 曾良

と書き残した。行く者の悲しみ、残る者の残念さ、対の亀が別れて、雲に迷うようである。予も又、

今日よりや書付消さん笠の露

四十 全昌寺 目次へ

【原文】

大聖持の城外、全昌寺と云寺に泊る。猶、かがの地也。曾良も、前の夜、此寺に泊りて、

終夜秋風聞やうらの山

と残。一夜の隔、千里におなじ。我も、秋風を聴きて、衆寮に臥。明ぼのの空ちかふ、読経聞ゆるに、板鐘鳴て、食堂に入。けふは越前の国へと、心早卒にして、堂下に下。若き僧共、紙硯をかかへて、階のもとまで追来。折節、庭中の柳散れば、

庭掃て出ばや寺に散柳

とりあへぬ一句、草鞋ながら書捨

【語釈・語り】

衆寮 禅宗寺院の寮舎。早卒 あわただしい。

芭蕉は有名人です。殺生石、遊行柳の段

に、馬を引く男に短尺を乞われた話がありました。

【現代語訳】

大聖持の城外にある、金昌寺と云う寺に泊まる。まだ、加賀の地である。曾良も、前の夜、この寺に泊まって、

終夜秋風聞やうらの山

と残す。一夜の隔たりは、千里に同じ。吾も、秋風を聞き、修行僧の寮舎に臥す。明け方の空も近く、読経が聞こえるうちに、鐘板が鳴って、食堂に入る。今日は越前の国へと、心もあわただしく、堂の下に降りる。若い僧たちが、紙や硯を抱えて、階段のたもとまで追いかけてきた。折しも、庭の柳が散っていたので、

庭掃て出ばや寺に散柳

とりあえずの一句を、草鞋ばきのまま書き流した。

- 四十一 夕越の松 天竜寺 永平寺 目次へ

【原文】

越前の境、吉崎の入江を、舟に棹指て、夕越の松を尋。

西行

よもすがらあらし
終宵嵐に波をはくばせて
月をたれたる汐越の松

この一首にて数景尽たり。若、一弁を加
ものは、無用の指を立るがごとし。
丸岡、天竜寺の長老、古き因あれば尋ぬ。
又、金沢の北枝と云もの、かりそめに見送り
て、此処まで、したひ来。所々の風景、過
さず、思ひつづけて、折節、あはれなる作意
など聞ゆ。今既、別に望みて、

物書て扇引割名残哉

五十丁、山に入て、永平寺を礼す。道元禅
師の御寺也。邦畿千里を避て、かかる山陰に
跡を残し給ふも、貴き故有とかや。

【語釈・語り】

長老 禅宗寺院の住職。過さず || 見逃さず。
かりそめに || ほんのそこまです。

【現代語訳】

加賀と越前の境の、吉崎の入江を船に棹さ
して、汐越の松を尋ねた。

西行

よもすがらあらし
終宵嵐に波をはくばせて
月をたれたる汐越の松

この一首でさまざまな美景が言い尽くされ
ている。もし、一言でも加える者があるなら、
五指に無用の一指を加えるようなものだ。

丸岡の、天竜寺の住持は、旧知の縁がある
ので訪問した。また、金沢の北枝という者が、
ほんのそこまでと見送りながら、この所まで、
ついてきた。所々の風景を見逃さず、句案を
続けて、折にふれ、趣のある着想など聞か
せてくれる。今いよいよ、別れに臨んで、

物書て扇引割名残哉

五十丁、山に入って、永平寺を礼拝した。
道元禅師のお寺である。帝都の地を千里避て、
このような山陰に教への跡を残されたのも、
尊い理由があるということだ。

四十二 福井 目次へ

【原文】

福井は三里計なれば、夕飯したためて出る
に、たそかれの道たどたどし。爰に、等哉と
云古き隠士有。いづれの年にや、江戸に來り
て、予を尋。遙、十とせ余り也。「いかに老

さらばひて有あるにや。将はた、死しにけるにや」と、人に尋たずね侍はべれば、いまだ存ぞん命めいして、そこそことをしゆ。市中しちゆうひそかに引ひき入いりて、あやしこいのえ小家こいえに、夕顔ゆがな、へちまのはえかかり、鶏頭けいとう、はは本々に、戸かどぼそをかくす。「扱さては、此このうちにこそ」と、門かどを扣たたけ、侘わびしげなる女いの出いでて、「いづくよりわたり給たまふ道どう心しんの御坊ごぼうにや。あるじは、このあたり何某なにがしと云いうものの方かたに行ゆぬ。もし用たずね給たまへ」と云いう。かれが妻つまなるべしと、しらる。「むかし物がたりなにこそ、かか風情ふうじやうは侍はべれ」と、やがて尋たずねあひて、其家そのいえに、二夜ふたよとまりて、

「名月なげつは、つるがの湊みなとに」と、旅立たびだつ。等裁とうさいも、「共に送おくらん」と、裾すそおかしうからげて、「道の枝折しおり」と、うかれ立たつ。

〔語釈・語り〕

ここは唯一の芭蕉ばしやうの一人旅ひとりりよです。心細こいさいいですね。其家そのいえ等裁とうさい宅たく。

〔現代語訳〕

福井は三里ほどなので、夕飯ゆうめしを食べてから出かけたが、夕暮ゆぐられの路みちは心細こいさいく足あしもとがおぼつかない。この地に、等裁とうさいと云いう古ふるくから知られた隠者いんしやがいる。いつの年としだったのか、江戸えどに来て、予よを尋たずねた。遙とほか十年じゅうねん以上いじやうも前まへだ。「どんなに老おいいさらばえているか、はたまた、死しんだのか」と、人に聞きけば、いまだ存ぞん

命いのちしていて、家はどこそこだと教えてくれた。
市いち中のひつそりと引っこんだ所で、粗末な
小こ家に、夕顔けいとうや、へちまの蔓つるが延び絡まり、
鶏頭けいとうや帚はきぎ本ほんが、入り口の戸を隠している。「さ
ては、ここに違ちがいがない」と、門かどぐち口ぐちを叩けば、
みすぼらしい女が出てきて、「どちらからおこ
しの道心のお坊様でしょうか。主人は、この
近くの何某なにがしと云う者の所に参まゐりまして。
もし用もちがおりならお尋ねください」と云
う。あれが妻に違ちがいがないと分わかった。「昔物語
でもなければ、こんな風情はあり得ない」と、
その足で、尋ねて等裁とうさいに逢あい、その家に、
二夜泊ふたよまつて、「名月なげつは、敦賀つるがの港みなとで」と、旅
立たつ。等裁とうさいも「いっしょに送りましょう」と、
裾すそをおかした具合ぐあひにからげて、「いざ道案内」と、
と、浮うかれ立たつ。

四十三 敦賀つるが 目次へ

【原文】

漸ようよう、白根しらねが嶽たけかくれて、比ひ那なが嵩たけあらは
る。あさむつの橋をわたりて、玉江たまえの芦あしは穂ほ
に出いけり。鶯うぐいすの関せきを過すぎ、湯尾ゆのお峠とうげを越こえれば、
火打ひうちが城じやう。かへる山やまに初雁はつかりを聞きき、十四日の
夕暮ゆぐれ、つるがの津つに宿しゆくをもとむ。

其その夜よ、月つき、殊こと晴はれたり。「あすの夜よも、かく
あるべきにや」といへば、「越路こしじのならひ、
明夜めいやの陰晴いんせいはかり難がたし」と、あるじに酒さけすす

められて、けいの明神に夜参す。仲哀天皇の御廟也。社頭神さびて、松の本間に月のもり入たる、おまへの白砂、霜を敷るがごとし。「往昔、遊行二世の上人、大願発起の事ありて、みづから葦を刈、土石を荷、泥濘をかはかせて、参詣、往來の煩なし。右例、今にかせて、参詣、往來の煩なし。右例、今にたえず、神前に真砂を荷ひ給ふ。これを、遊行の砂持と申侍る」と、亭主のかたりける。

つききよ　ゆぎよう　すな　うえ
月清し遊行のもつる砂の上

十五日、亭主の詞にたがはず、雨降。

ほくこくびよりさだめ
名月や北国日和定なき

【語釈・語り】

神さびて神々しく。

【現代語訳】

次第に白根が嶽が見えなくなり、比那が鷲が現れる。あさむつの橋を渡って、玉江の芦の穂が出ているのが目についた。鷲の関を過ぎて、湯尾峠を越れば、火打が城である。帰山に初雁の声を聞きて、十四日の夕暮れに、敦賀の港に宿をとる。

その夜は、月が特によく晴れた。「明日の夜も、このようだろうか」と言えば、「越路の天氣のつねで、明日の夜の曇るか晴れるかは予

想がつきません」と、主に酒をすすめられ、
氣比の明神に夜参する。仲哀天皇の御廟で
ある。境内は神々しく、松の本の間に月光が
漏れさしている様は、神前の白砂が、霜を敷
いたようである。「その昔、遊行二世の上人
が、大願を發起し、自ら葦を刈り、土石を担
って、泥濘を乾かせてより、参詣や、往來の
支障がなくなつた。その古例が今でも絶えず、
歴代の遊行上人は神前に真砂を担いお運びに
なる。これを、遊行砂持と申します」と、
亭主は語つた。

つききよ
月清し遊行のもてる砂の上

十五日、亭主の言葉通り、雨が降る。

ほくこくびよりさだめ
名月や北国日和定なき

いろ
四十四種の浜 目次へ

【原文】

十六日、空晴れたれば、ますほの小貝ひろ
はんと、種の浜に、舟を走。海上七里あり。
天屋何某と云もの、破籠、ささへなど、こま
やかに、したためさせ、僕あまた舟にとりの
せて、追風、時の間に吹付ぬ。浜は、わづか
なる蚤の小家にて、侘しき法華寺有。爰に、
ちやをのみ、酒をあたたためて、夕暮のさびし

さ、感に堪たり。

さびしやすまに勝たる浜の秋

波の間や小貝にまぐる萩の塵

其日の日記、等裁に筆をとらせて、寺に残す。

【語釈・語り】

吹付ぬ吹き着いた。

【現代語訳】

十六日、空が晴れたので、ますほの小貝を拾おうと、種の浜に舟を走らせる。海上七里ある。天屋何某と云う者が、破篋や小竹筒など、心をこめて支度させ、僕を多く舟に乗せて出たが、追風を受けて、たちまち吹き着いた。浜は、みすぼらしい漁師の小家があるだけで、侘びしい法華寺があった。ここに、茶を飲み、酒を温めて興を尽くしていると、夕暮れのさびしさが、感に堪えた。

さびしやすまに勝たる浜の秋

波の間や小貝にまぐる萩の塵

その日の日記を、等裁に書かせて、寺に残す。

【原文】

露通ろつうも、このみなと迄、出いでむかひて、みの
 の国くにへと伴ともなふ。駒こまをはやめて、大垣おおがきの庄しやうに入いれ
 ば、曾良そらも、伊勢いせより、かけ合あひ、越人えつじんも、馬
 をとばせて、如行じようこうが家に入いり集あつまる。前川ぜんせん子し、
 前けい口こう父ふ子し、其外そのほか、したしき人々、日夜とぶら
 ひて、ふたたび蘇生そせいのものにあふがごとく、
 且かつよろこび、且かつなげきて、旅たびのものうさも、
 いまだやまざるに、長月ながつき六日むいかになれば、「伊勢
 の遷宮せんぐう、おがまん」と、又ふねに乗のりて、

はまぐり
 蛤はまぐりのふたみに別行わかれゆく秋ぞ

【語釈・語り】

曾良も元氣になつたようです。でも、旅は
 まだ続きます。余韻を残して完。

【現代語訳】

露通ろつうも、この敦賀の港まで出迎むかへにきて、
 美濃みのの国くにへ同行する。馬を速めて、大垣おおがきの庄しやう
 へ入ると、曾良そらも、伊勢いせより、駆けつけ、
 越人えつじんも、馬を飛ばせてやっ来て、如行じようこうの家
 にみなが集あまった。前川ぜんせん子し、前けい口こう父ふ子しや、そ
 の他、親しい人々が、日夜訪ねてきて、再び
 あの世から蘇生そせいした者に会うかのように、且

つ喜び、且つ嘆きて、旅のつらい思いも、まだ残っているのに、九月六日ともなったので、「伊勢の遷宮を、拝もう」と、又舟に乗って、

はまぐり
蛤わかれゆくのふたみに別行秋ぞ

参考文献・URL

芭蕉自筆奥の細道 岩波書店

おくのほそ道評釈 尾形 侑

松尾芭蕉集2 新編日本古典文学全集

「奥の細道」名句でたどるみちのくの旅

NHK「古典購読」佐藤 勝明

芭蕉庵ドットコム

<http://www.bashouan.com/index.htm>